

## S100P in Duodenal Fluid Is a Useful Diagnostic Marker for Pancreatic Ductal Adenocarcinoma

松永, 壮人

<https://hdl.handle.net/2324/2236060>

---

出版情報 : Kyushu University, 2018, 博士 (医学) , 課程博士  
バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)



氏 名：松永壮人

論 文 名：S100P in Duodenal Fluid Is a Useful Diagnostic Marker for Pancreatic  
Ductal Adenocarcinoma

(十二指腸液中 S100P 濃度測定が膵管癌診断の有用なマーカーとなりうる)

区 分：甲

論 文 内 容 の 要 旨

目的：膵管癌の有用なスクリーニング法の確立が望まれている。本研究は上部消化管内視鏡検査 (Esophago-gastro-duodenoscopy: EGD)や超音波内視鏡(Endoscopic ultrasonography: EUS)時に採取した十二指腸液中の分子マーカーが膵管癌のスクリーニングに有用かどうかを検討した。

方法：本試験は2011年10月から2014年7月の間に、九州大学でEGD、あるいはMayo clinic(フロリダ州・ジャクソンビル)でEUSを受けた膵管癌患者94名、膵管内乳頭粘液性腫瘍(intraductal papillary mucinous neoplasm; IPMN)患者85名、慢性膵炎患者29名、正常膵の対照者61名を含む計299名で行われた。十二指腸液はセクレチンを投与せずに採取され、分子マーカーとして十二指腸液中CEA(Carcinoembryonic antigen)とS100Pの濃度を測定した。

結果：十二指腸液中S100P濃度は膵管癌群、慢性膵炎群で正常膵対照者群より有意に高かった。S100P濃度と年齢を合わせたロジスティック回帰モデルでは、stage 0/Ia/Ib/IIaの膵管癌の診断感度、特異度は85%、77%であり、receiver operating characteristic カurveから算出される area under the curve は0.82であった。十二指腸液中CEA濃度は各膵疾患群と正常膵群の間に有意差を認めなかった。

結果：一般的な検査であるEGD時に施行可能な十二指腸液中S100P濃度測定が、膵管癌の診断に有用な可能性が示された。